



## 松坂屋と大丸

平成25年9月1日(日)→11月26日(火)

享保2(1717)年、下村正啓が京都伏見に呉服店「大文字屋」を開業したのが大丸の起こり。正啓は続いて享保11(1726)年、大坂心齋橋筋に「松屋」を出店。さらに享保13(1728)年、名古屋へ進出した。このとき用いた商号が「大丸屋」であった。名古屋店発展の波に乗って、寛保3(1743)年には大伝馬町に江戸店を開業した。

一方松坂屋は、慶長16(1611)年、伊藤祐道が名古屋に呉服小間物問屋「伊藤屋」を開いたのが始まり。元文元(1736)年に呉服太物小売りに業態を転換した。4年後の元文5(1740)年に尾張藩の呉服御用となり、明和5(1768)年には上野松坂屋を買収し、江戸へ進出した。2つの呉服店は、東都や名古屋で競い合い、ときには歩調を合わせながら地歩を固め、やがて百貨店へと発展を遂げた。

## 名古屋の大丸

### 名古屋進出

享保2(1717)年、京都伏見に呉服店を創業した大文字屋は、それから11年後の享保13(1728)年に呉服卸商として名古屋の富田町(本町四丁目とも。明治4年から本町五丁目に町名を変更)に進出した。このときはじめて大丸を名乗った。翌14年、小売りに転業。「現金掛け値なし」の新商法で大いに賑った。やがて、間口15間半余(28m)、奥行19間(34m)の大店舗となり、「御城下第一」の看板を掲げるまでになった。



大丸屋の引札(享保19年)

### 店舗所在地

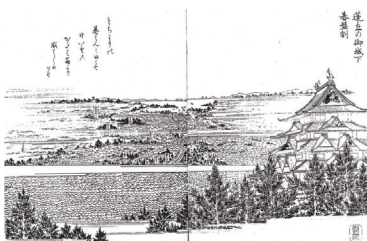
大丸が店舗を構えた富田町(本町四丁目)は、現在の錦二丁目にあたる。基盤割と言われた城下町のほぼ中央に位置し、北西に桜天神社、南に高札場(札の辻)があった。江戸以前は、織田家の菩提寺・万松寺の一角を占めた。万松寺は信長の父・信秀が開祖したもので、創建時の寺域は現在の中区錦と丸の内二、三丁目にまたがり、その敷地は5万5000坪にも及んだという。



「尾府名古屋図」(宝永6年)

### 尾張藩御用達商人

文化2(1805)年、尾張藩は、藩の財政に最も貢献したとして、伊藤家、関戸家、内田家を、御用達商人の最高位である「三家衆」に列した。次位の「除地(よけち)衆」には、笹屋(現岡谷鋼機)岡谷惣助、十一屋(現丸栄)小出庄兵衛などとともに、大丸屋下村正之助が名を連ねた。下村家は、他国出身の商人としては別格の待遇を受けていたのである。



「小治田真清水」(嘉永6年)

### 名古屋藩通商会社

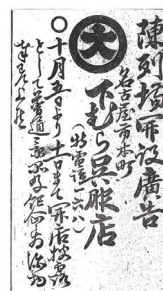
明治の世になっても、大丸の勢いは続いた。明治4(1871)年4月、下村正之助は岡谷惣助とともに名古屋藩通商会社の総頭取脇の役職を担い、総頭取の伊藤次郎左衛門を補佐した。同年の『名越(なごや)各業独(ひとり)案内』にも、呉服太物類として、茶屋町・伊藤治(次)郎左工門に続いて、本町四丁目・大丸屋正之助の名前が見える。



『名越各業独案内』(明治4年)

### 陳列販売

呉服店における明治時代の経営改革の最たるものは座売りから陳列立売り販売への転換である。名古屋で最初に陳列場を設けたのは、明治34(1901)年2月19日(旧正月1日)開設の十一屋呉服店(小出呉服店とも)であった。それから1年8ヵ月後、同じく本町(ほんまち)通の大丸呉服店が陳列場開設に踏み切った。



新聞広告(明治35年)

### 4大呉服店

明治時代、名古屋で4大呉服店と謳われたのは、いとう呉服店(松坂屋)、下むら呉服店(大丸)、十一屋呉服店(丸栄)、桔梗屋呉服店で、いずれも当時のメインストリートである本町通に店舗を構えていた。繁華街が本町通から広小路に移りつつあるときに、いち早く栄町に進出したという呉服店と十一屋呉服店は、百貨店へと変貌を遂げたが、本町通に残った下むら呉服店と桔梗屋呉服店はやがて撤退した。



新愛知新聞「4大呉服店双六」(明治42年)



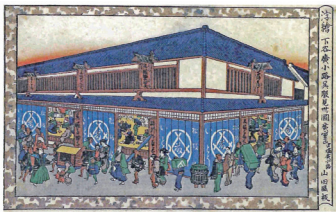


## 錦絵と図版に見る松坂屋と大丸

江戸時代から続く大店として知られた松坂屋と大丸は、昔から好一対として語られることが多い。ビジュアル面でも、錦絵や便覧など同じ媒体に描かれることも珍しくなかった。

### 「浮絵呉服見世ノ図」(天保末期)

西洋画の透視遠近法を応用し、画面の奥行きの深さや距離感を誇張して表した江戸時代の絵に「浮絵」がある。その浮絵の代表作が、歌川広重が描いた「浮絵下谷広小路呉服見世ノ図」と「浮絵大丸呉服見世ノ図」。



「浮絵下谷広小路呉服見世ノ図」



「浮絵大丸呉服見世ノ図」

### 「尾張名所図会」(天保15年)

「尾張名所図会」は、江戸末期から明治初期にかけて刊行された尾張の地誌。編纂を岡田啓と野口道直、挿絵を小田切春江が担った。京町通茶屋町と本町通の賑わいが描かれている。



「伊藤呉服店」  
「尾張名所図会」



「本町四丁目大丸屋店」  
「尾張名所図会」

### 「名所江戸百景」(安政期)

歌川広重の「名所江戸百景」は、すべてが縦構図の風景画で、その遠近を大胆に取り入れた描法は、ゴッホやゴーギャンにも影響を与えたといわれる。このシリーズで描かれた呉服屋は、松坂屋、大丸、越後屋(三越)、白木屋の4店。いずれも後に百貨店になった。



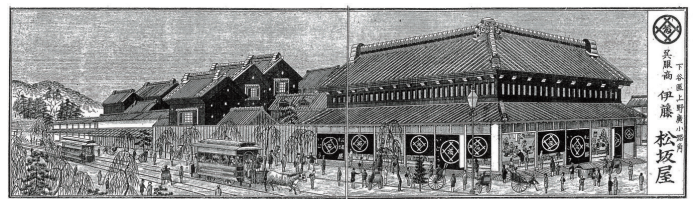
「下谷広小路」  
「名所江戸百景」(安政3年)



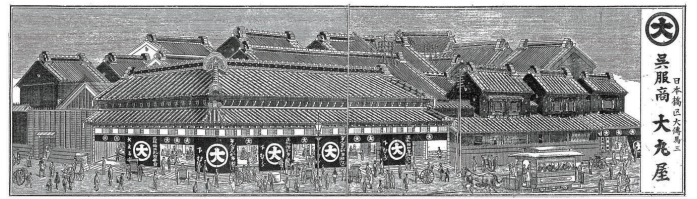
「大伝馬町ごぶく店」  
「名所江戸百景」(安政5年)

### 「東京商工博覧絵」(明治18年)

編集兼出版人の深満池源次郎が、明治時代の70の職種の店舗、工場、農場などを詳細な図入りで紹介した。ほとんどが1頁1店舗のなかにおいて、「呉服商」伊藤松坂屋と大丸屋は2頁見開きで掲載されている。



「呉服商 伊藤松坂屋」  
「東京商工博覧絵」



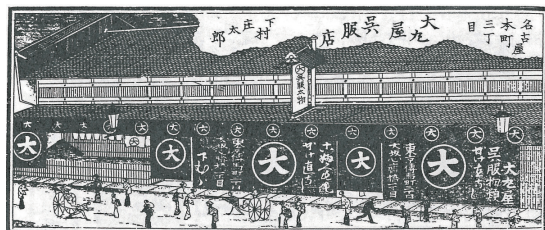
「呉服商 大丸屋」  
「東京商工博覧絵」

### 「尾陽商工便覧」(明治21年)

『尾陽商工便覧』は、尾張の代表的な産業を絵画で紹介したもので、明治中期の商家の様子や風俗を知る手引書にもなっている。伊藤呉服店と大丸屋呉服店は、「名古屋区」の最初の頁に相対する形で掲載されている。



「伊藤呉服店」  
「尾陽商工便覧」



「大丸屋呉服店」  
「尾陽商工便覧」



電話(052)251-1111 www.matsuzakaya.co.jp

【営業時間】本館地下2階~3階、南館地下2階~4階、北館1階は10時~20時 その他のフロアは10時~19時30分 ただし、本館9・10階、南館6・7・10階、北館地下1階で営業時間が異なる店舗もございます。